

第 19 回研究会

2025 年 2 月 15 日

英語指導法研究会第 19 回研究会は恒例企画！あきた COFS&英語授業研究会協同企画の「4 月から教壇に立つ学生の不安や悩みに応える」です。教員採用試験に見事合格し、来年度から教員デビューをする 4 年生を中心とした若い先生たちのための特別企画です。今年で 4 年目になりました。

第 1 部は「若手英語教員奮闘記」として、現在、教師としてバリバリ働いている秋田と青森出身で若手の先生から、等身大の体験談を語ってもらいました。

第 2 部は「4 月から教壇に立つ学生の不安や悩みに応える」として、春から教壇に立つ学生から、先生として仕事をする上で、不安なこと、疑問なことを聞いたり、アドバイスをもらったりざっくばらんにお話する時間にしました。

秋田県と青森県からだけでなく、全国各地から合計 20 名の参加がありました。

第 1 部「若手英語教員奮闘記」

長谷川 美夕先生（町田市立薬師中学校）

1. 自己紹介

- 一学年の副担任
- 英語科 1～3 年の少人数教室
- バドミントン部

※研究会当日もぎりぎりまでバドミントン部の練習試合があって、終わりのあいさつをした直後からの参加だったようです。

- 校務分掌：学習連絡部・研究推進委員会・会計・給食・など

2. 勤務校について

- 薬師池や町田リス園、町田ゼルビアなどが有名
- 3 学級×3 学年 生徒の顔と名前が覚えやすい規模の学校
- 自然豊かで落ち着いて指導している
- 学校行事に文化祭がないことが、秋田と違うなと思っている
- 先月は校外学習でスキー実習に行ってきた
- 着任からの仕事の流れのまとめ

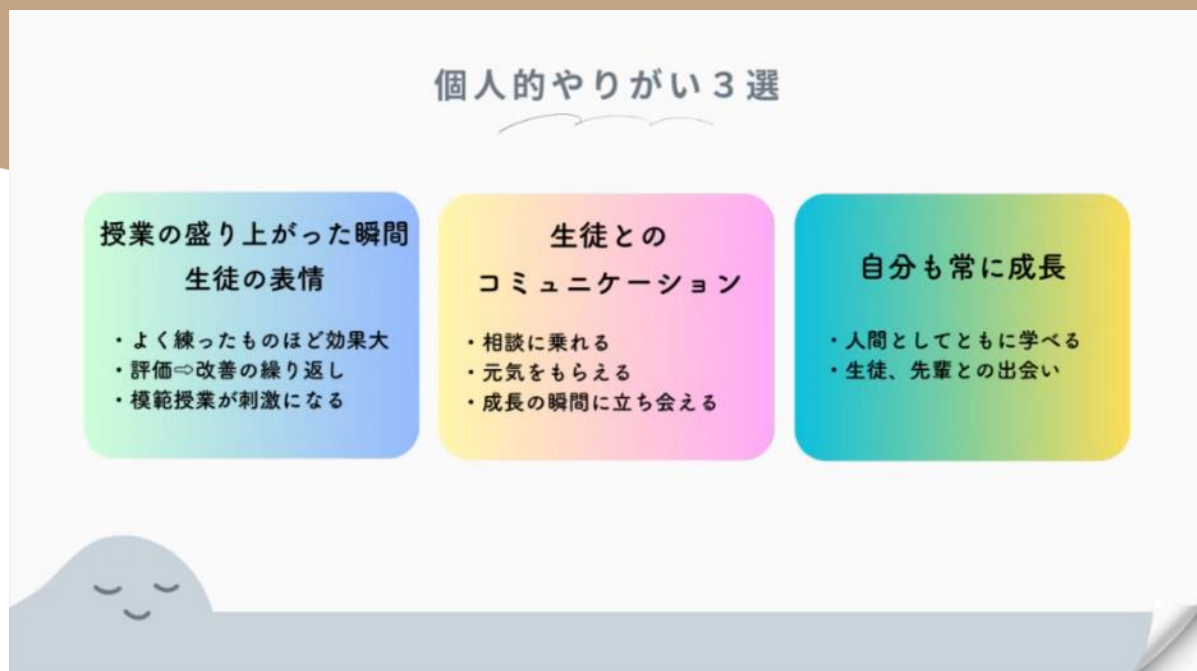


- 配属が決まった段階で家を探し、卒業式の次の日にアパートに移動、3月はだいぶ忙しかった
- 3月の最終週から、実際に学校に行ってみる、慣れるための体験勤務があった
- 4月は生活のリズムを作るのが大変だったが、「やるしかない」という気持ちでがんばった
- 町田市では1年目の教員は研究授業を最低3回やる必要があり、5月、9月、1月に実施した。指導案を前もって作成し、管理職の先生中心にチェックしてもらい、授業をやった後は、学校の先生全員からアドバイスをもらった。もっと指導案の作り方を大学の時にやっておけばよかったなと思った。
- 2泊3日の校外学習では、教員として参加する校外学習は、生徒として参加するものとは全く感覚が違って、とにかく無事でいてほしいと心配したが、何事もなく終わることができてほっとしている。
- 現在、学年末テストの準備をしている

3. 仕事のやりがいと大変なところ

- 昨年度、学生としてこの研修会に参加していて、「大変そうだな」と思っていたが、実際は想像以上でだった。
- 大変なこと
 - ① 授業準備：週20コマでゼロからの準備はとても忙しかった
 - ② 部活動：週4で活動する部活、大会の引率
 - ③ 生徒指導：1年目だから、初心者だからという目では見てもらえない
 ※時間管理は永遠のテーマ

● モチベーション



① 英語の授業を一番がんばりたい！

「わかった！」

「できた！」

「これおもしろーい！」

「もう終わり？」

という生徒の声

② 素直な生徒が多いので、子どもの相談、他愛ない話しかから元気がもらえる

③ いろいろな人との出会いに日々感謝している

4. 大学卒業までの過ごし方

● いつかやりたい！はやっておこう

① 旅行に行けばよかったなあ

② ファッション：ピアス・金髪など

③ 視覚のための勉強：TOEIC, TOEFL, 英検などは大学生のうちに！

④ 教材研究：勤務校で採択している教科書は見ておきましょう！

● 朝方の習慣づくり

● 譲れない自分の指導観

① 一年目はすべてが初めて迷う部分がたくさんある。その時に頼りになるのが、自分の中の譲れない指導観、大切にしたい部分を1つか2つ決めておくといい

② 生活指導も、これはいいよとするかダメとするべきか、迷うところがたくさんある。そんな時、最終的には「どんな人間になってほしいか」を持っておくことが大事。

※ 長谷川先生は「礼儀を大切にできる人間になってほしい」と「まじめにがんばっている人が損をする集団になってほしくない」だそうです。

内海 里菜先生（流山市立小山小学校）

1. 自己紹介

- 全校生徒 1,600 名を超える大規模校に勤務
- 3 年生（34 名）の担任，図工主任，出席簿主任，学年特活担当（
- 趣味はドラマと料理

2. 不安だったこと

- 何曜日であっても 4 月 1 日から社会人スタート
- その前にはちゃんと朝方・早起きの習慣づけを！
- 教材研究
前日（これでは夜更かしになって，まずいと思った）
土日まとめて 2 週間分
長期休みに単元をまとめて貯金して，放課後や週末に微調整とする
- いろんな子ども，保護者，同僚がいるが
「でも，子どもを思う気持ちは一緒」
「すぐに悩み相談」＆「雑談」
- 先生は忙しいの？
慣れるまでは大変です
計画や見通しをもてると心の余裕
※子どもにも，保護者にも，同僚にもあいさつ・礼儀は必要だなと感じている

3. 1 年目を振り返ると

- 不安が大きかった
- 何をするにもおびえていた
- 初任者研修・初任者指導
- 学年の仕事
- 大量の丸付け
- 気づいたら 18：00
- やっと夏休み：遊んで，しっかりリフレッシュ！
- いろんな先生に相談する中で「誰だって月曜の朝は憂鬱だよ」とか「私も 1 年目はこんなことがあって大変だったよ」という話を聞いて心が楽になった
- 若手なので，隣のベテランの先生の板書をみてそのまま次の授業でやる，子どもたちに作業をさせている間に，隣の先生がどんな声掛けをしているのかをちらっと見に行くなど，とにかく参考にした
- スケジュール帳を使って計画を立てて，見通しをもって仕事をする→心の安心

4. 2年目

- 持ち上がりだからこそ、学年のルールの共有、児童理解の安心
- 1年目の反省点を生かしての学級開き
- 2年生と3年生の学習の系統性を理解して授業を作ることができた
- 同期や友達との情報共有
- 2年目の経験値
- 他の先生方など人脈の広がり
- 授業づくりが面白くなって+時間がかけられることで、子どもの「できた！」を多く見られるようになった

5. アドバイス

- 周りの先生に頼りましょう！（あいさつ・礼儀を忘れずに！）
 - ✓ いいことも悪いこともちゃんと報告！
 - ✓ 研修の際に学級に入ってくれた先生への「ありがとうございました」
- 自分ができることをする
 - ✓ できることは限られているが、やれることを探してやったほうが経験値アップになる
 - ✓ 研修を精一杯受ける
 - ✓ 負かされた学級と向き合う
 - ✓ 学年の仕事でもできる仕事はあるはず！すかさず手をあげてやりましょう！
- 若手のうちは教材研究をするしかない
 - ✓ 本を読んだり、研修会に参加した方が、来年の自分のためになる
 - ✓ 初めて指導することは、子どもに責任をもって勉強すること
- メリハリをつける
 - ✓ 週末すべて残業するのではなく、この曜日は残業する、その代わり週末は仕事を持ち帰らずしっかりリフレッシュする！
 - ✓ 1年目は6:00に出勤して、気が付いたら19:00・20:00まで仕事をしていた時もあったが、2年目は7:30に出勤して17:30に帰れる日も多くなってきた
 - ✓ やるべきことをちゃんとやって、早く帰る日は早く帰るメリハリをつけると、心身ともに健康に生活できる
- 1年目があるから
 - ✓ 大変な1年目があったからこそ、2年目があると思う
 - ✓ いろんな大変なこと、時にはつらいこともあると思うが、それをひとつひとつ乗り越えようと、次の年はよりいい世界が見えることもあることを伝えたい
- その子の〇年生は1度きり
 - ✓ 教員はうまく行かなくても次の年、次のチャンスにリベンジできるが、子どもにとってはその友達と過ごす一年はこの一年しかないし、その日はその日しかないし、その教材とかその習うことに初めて出会うのはその日しかない

- 子どもと遊ぶ
 - ✓ 休み時間は子どもと遊んで心を通わせましょう！
- 褒める！褒める！褒める！！！！
 - ✓ 子どもの「直したい部分」に目がついつい行ってしまうが、褒めて、褒めて、褒めまくった方が、なんだか学級が安定する、自分にとっても気持ちがいい日になる。
 - ✓ 「〇〇さん、姿勢よくして！」よりは「〇〇さんの姿勢がとってもいいね！」

第2部「4月から教壇に立つ学生の不安や悩みに応える」

参加者全員で、4月から教壇に立つ学生の悩みついてざっくばらんに語りました。

学生から出された悩みとしては・・・

- 塾にっている児童生徒とそうでない児童生徒との学力差への対応
- 部活動における保護者との対応

が挙げられました。

若有先生から

長谷川先生、内海先生の発表を聞いて、成長を感じることができました。自分が初任だった時と比較して、長谷川先生はずいぶん立派だなと感じた。2人に共通することはうまく先輩を頼りながら、自分がやるべきことをやっていて、明るい見通しをもってお仕事をされているということです。近年、せっかく先生になっても離職するケースがあって、そうならないように、どんな支援ができるか考えています。そういう意味で、学生、若手の先生、ベテランの先生が、授業のこと授業以外のことについて情報交換できるこの回は私たちにとって「原点」を確認する非常に貴重な機会だと思っています。

（文責：佐藤 剛）